

第3章 阿津賀志山防塁の価値と構成要素

第2章において、阿津賀志山防塁の概況と現況についてまとめた。第3章では、それら概況や現況から阿津賀志山防塁の価値についてまとめ、その価値を構成する要素が何であるかを明らかにすることで、保存・保護の対象と活用の展開につなげる。

1. 阿津賀志山防塁の価値

阿津賀志山防塁の本質的価値は、以下の5点の視点からまとめることが出来る。

- (1) 奥州藤原氏が東北一円を実質支配したことを実証する南限施設であること。
- (2) 文治五年奥州合戦を決定付けた阿津賀志山の戦いの場であり、「治承・文治の内乱」を具体的に示す唯一の場所であること。
- (3) 奥州藤原氏が築いた長大な構造物であり、12世紀の土木技術を如実に示すものであること。
- (4) 境界・交通の要衝である国見町の地勢と風致を表し、歴史の根源であること。
- (5) 日本の二大防塁遺跡であること。

(1) 奥州藤原氏が東北一円を実質的に支配したことを実証する南限施設であること。

岩手・秋田県域にある奥六郡と山北三郡支配から始まる藤原氏の領域支配は、藤原氏三代の100年を経て、実質支配範囲を陸奥・出羽の全域に広げ、三代秀衡においては陸奥国司に任命されることにより、その支配が公権より承認されるまでになる。

阿津賀志山防塁は福島県と宮城県の間境に位置するが、この境界ラインは6世紀における大和政権の地方統治システムである国造制が敷かれた最北ラインと重なるラインである。このことからすれば福島県域は東北地方においても早くから畿内を中心とする中央集権国家圏内に含まれていたことが知られ、7世紀後葉段階でいち早く県内の郡衙機構が整備されたことでもそのことを知ることができる。また12世紀には在地豪族による中央の権門勢力を恃んだ荘園化が進む地域であり、宮城県以北とは異なる地域的特色を有していたといえる。このような背景を持つ県境ラインに築かれた防塁は、藤原氏が南に勢力を伸ばすために超えていかなければならない衣川ライン・多賀城ライン等に次ぐ最南部ラインとすることができ、さらにその南部に重臣である佐藤一族が勢力を張ることで睨みを利かせていたと考えることができる。

阿津賀志山防塁は合戦に備えるために急遽築かれた前線防御施設であるが、古代以降の歴史的観点からしても実に意味深い場所に築かれた施設であり、その構築のための動員体制を考えれば、東北南部における藤原氏の実質的な支配を実証できる貴重な遺構とすることができる。また、阿津賀志山防塁の構築場所は、古代より境界領域であった歴史をもつ国見町において、佐藤一族の存在とともに、地勢が活かされた選地であったと考えられる

が、同時にここより北側が堀の内、すなわち平泉藤原氏の領内であること示していると考えられる(八重樫 2015)という指摘が注意される。

(2) 文治五年奥州合戦を決定付けた阿津賀志山の戦いの場であり、「治承・文治の内乱」を具体的に示す唯一の場所であること。

文治五年奥州合戦は、1180年(治承4年)の以仁王の挙兵にあわせた平家追討の令旨に端を発する10年間にわたって繰り広げられた古代最後の内乱(治承・文治の内乱)の最終合戦である。初めての武家政権樹立者である平清盛に連なる平家一門を壇ノ浦に滅ぼし、関東以西を手中に収めた源頼朝は、その矛先を、義経追討を口実として奥州藤原氏へと向け、文治五年奥州合戦へと突入する。

動員された軍勢は、奥州藤原氏が陸奥・出羽の2ヶ国を合わせ17万騎(『吾妻鏡』文治五年九月七日条)と記され、源頼朝率いる鎌倉方の軍勢が「軍士二十八万四千騎、ただし諸人の郎従等を加う」(『吾妻鏡』文治五年九月四日条)との記述がある。また、鎌倉方は、出羽・陸奥を除く六十四か国の武士が動員されたことも明らかになっており(入間田 1983)、全国的な規模での合戦であった。このことは、鎌倉幕府の成立を目指す源頼朝による時代の転換となる合戦であったことを物語っており、平安時代を締めくくり、鎌倉時代の成立を決定付けた出来事であったということが出来る。そして全国的な規模での時代の転換もさることながら、東北地方においては奥州合戦の功績により奥州藤原氏に代わる新たな領主として、中世から近世の東北史において中心的役割を果たす伊達氏・相馬氏・葛西氏などが入部することとなり、大きな分岐点となった。

以上の要素を持つ奥州合戦において、最大の合戦が繰り広げられ、同合戦によって構築された唯一の遺構であるのが阿津賀志山防塁である。阿津賀志山防塁は、奥州合戦最大の激戦地となり、奥州藤原氏の敗北が決定的となっただけでなく、明治維新までの東北史に影響を及ぼすほどの大きな出来事を現在に伝え、源頼朝による鎌倉幕府成立という日本史上の画期を語る上で欠かすことのできない歴史遺産である。

(3) 奥州藤原氏が築いた長大な軍事構造物であり、12世紀の土木技術を如実に示すものであること。

奥州藤原氏により築かれた3.2kmの阿津賀志山防塁は、のべ25万人の労働力が動員され、藤原国衡の本陣である「大木戸」などを合わせると総計40万人が動員されたとみても大過はないとの推定がなされている(小林 1979)。当時の奥州藤原氏が、源頼朝を迎え撃つために総力をあげ、広域的な動員により構築した遺構である。

このような巨大土木工事が可能となった背景については、「当時の国・郡の行政機構を接収して、平泉の意のままに動かすという非常時の体制がかたちづくられていたからにはほかならない」との指摘がなされ(入間田 2016)、非常時において古代からの国衙機能を広域的

に統括する存在として奥州藤原氏の政権が権力を集約していく状況が推定される。阿津賀志山防塁は、その状況を象徴するものとして位置付けられる。

また、交通路を遮断し、敵騎兵の進軍を阻むことのできる防塁は、源平合戦から続く内乱期における戦闘方法を伝える代表的な史跡である(川合 1991)。当時の交通を遮断する戦術は、山陽道を遮断する施設が設けられた一の谷合戦などの類例があるが、現存するのは唯一阿津賀志山防塁だけである。防塁構築の時期を、源頼朝が全国に動員令を発した直後の文治5年3月~4月とすれば、藤原秀衡の遺言により「大將軍」とされた源義経はまだ存命であり、義経の発案や大將軍としての命令があったのではないかとの指摘もなされている(入間田 2016)。

防塁構築期間を源義経が存命する4月から合戦開始前の7月末までの4か月(120日)とすれば、1日の労働力動員数は約2,000人(前掲25万人から計算)となり、動員範囲は宮城県域の刈田郡、福島県域の伊達郡・信夫郡に及ぶと考えられる(小林 1979)。完成には1日27mの構築が必要となるが、河川による開析地の横断や湿地帯および凝灰岩層の掘削が必要な箇所もあり、難航した部分も多かったと考えられる。また、河岸段丘などの自然地形が持つ防御機能を加味しながら防塁形態を変えているなど、場所ごとの工夫や難工事区の解消方法を考慮すると、当時の土木技術のありようをうかがうことができる。

(4) 境界・交通の要衝である国見町の地勢と風致を表し、歴史の根源であること。

阿津賀志山防塁は800年間その遺構を留め、現在も二重堀地名を残すなど、阿津賀志山のある景観とともに、国見町を特徴づけている遺産である。国見町の地勢は、宮城県境の峠に向う地峡部に交通路が集約し、その入り口を阿津賀志山が阻むようにあり、福島県中通地方の北端、福島盆地の北縁に位置する境界領域としての国見町が持つ地政学的意義を象徴している。特にその地峡部は古代東山道、中世奥大道、近世奥州街道と各時代の幹線道路の難所峠道として知られており、東北の奥地へと入る境界として印象付ける空間であった。古代道奥の内国化のために北上した将軍たちが蝦夷の領域に足を踏み入れる前に国見の地で勧請したとの由緒を持つ神社、あるいは境界である関(下紐の関)としての伝承地が存在し、江戸時代「奥の細道」においては峠越えの印象深い記述がなされている。また文久元年(1861年)の「西大窪村絵図」には阿津賀志山防塁の位置が示され、多くの人々に認知されていたとともに、耕地とならず保護されていたことを知ることができる。

阿津賀志山防塁はこのような長いあいだ醸成されてきた国見町の歴史的風致の大きな要素の一つとすることができ、県境の町に生きる町民の意識の底に根付いたものと考えることができる。その意味でも、国見町が歴史のまちであることの根源となる史跡であると言える。

(5) 日本の二大防塁遺跡の一つであること。

阿津賀志山防塁は日本の二大防塁の一つとされている。もう一つが福岡県の博多湾沿岸

に築かれた史跡元寇防塁である。1273年（文永10年）元を治めるフビライは東アジア支配の一環として日本へ出兵し、日本の島々を襲った後、博多に上陸し鎌倉幕府軍との戦闘（文永の役）におよんだ。数日間の戦闘の後、元軍は引き上げたが、鎌倉幕府は再来襲に備え、博多湾岸に20kmにわたる石築地（元寇防塁）を築造した。築造は6か月の予定で計画が立てられ、その負担は九州各国全体に割り当てられ、賦課の基準は所領1段につき石築地1寸であったとされる。築造の命令系統は各国の守護が管轄内の領主に築造の命令をだし、領主は分担の場所に道具をもって、人夫をつれて工事をする方式であった。石塁の規模は基底幅3.1m、上面幅2.5m、高さ2.6mである。二重堀と三重土塁構造の阿津賀志山防塁とは大きく異なるものであるが、外敵を防ぐという同様の目的を有する構造物である。元寇防塁は奥州合戦から約100年後に築かれたものであり、築造場所の特質や戦略面の違いが、形状の違いを生じさせていると考えられ、築造期間や築造方法などは阿津賀志山防塁を考えるうえで大いに参考となる史跡であるといえることができる。

元寇防塁が完成してから5年後の1281年（弘安4年）、フビライは再び日本へ出兵する（弘安の役）が、この時の派遣兵士の数は14万であったという。鎌倉幕府軍は武運に恵まれ外圧を退けることができたが、奥州合戦における二十八万四千騎の頼朝軍を迎え撃った藤原軍は、阿津賀志山防塁を突破され奥州を守りきることはできなかった。

阿津賀志山防塁と元寇防塁は鎌倉時代のエポックとなるできごとを現在に具現する遺構である。ふりかえれば二つの防塁は古代における軍団兵士遠征地の入り口と防人の配置先に設けられた防御施設であった。その意味で二つの箇所は律令体制成立以降国を治めていくうえで長年にわたり無視できない箇所であったと考えることができる。長きに亘り権力者の中に内在していた課題が、時を経て二つの防塁に顕現したとすることも可能である。

※ 664年（天智天皇3年）に築かれた国指定特別史跡「水城跡」（福岡県 太宰府市・大野城市・春日市）も含め、「日本三大防塁」と呼称することもある。

2. 阿津賀志山防塁の価値を構成する要素

本史跡の価値は、史跡本体のみならず、この地に構築することとなった自然地形や交通網、また周辺を取り巻く関連文化遺産及びこれらを後世に伝えていこうとする人々の営みなど、あらゆる要素により構成されている。これらの要素を以下に示す。

① 史跡本体の価値を示す要素
3.2km という長大さ
二重の堀と三重の土塁からなる構造
当時の土木技術を如実に残す史跡
奥州藤原氏が東北一円を実質的に支配していた証
奥州合戦最大の激戦地
日本史の転換の舞台
② 史跡周辺において価値を示す要素
阿津賀志山（山体を含む景観）
滑川・阿武隈川
自然地形（尾根・河岸段丘・湿地・斜面地）
低位段丘面におけるかつての泥田の景観・地形
交通路（東山道・奥大道）・交通の要衝
阿津賀志山防塁周辺の関連遺跡・文化遺産群
阿津賀志山防塁を取り巻く歴史的風致
小・中学校校歌
国見町郷土史研究会
国見町文化財ボランティア
吾妻鏡
鹿島神社記
観音寺縁起
義経まつり